

氏名	菊地 美帆	(学籍番号 14DN04)	
学位の種類	博士(看護学)		
学位記番号	28号		
学位授与年月日	2023年3月9日		
論文題目	わが子に性別違和感をもつ母親に対する支援のあり方に関する研究		
論文審査担当者	委員長	鶴田 恵子	教授
	委員	久保田 君枝	教授
	委員	川向 雅弘	教授
	委員	藤本 栄子	教授
	委員	宮谷 恵	教授

## 論文要旨

### 【研究背景】

わが国では、2004年に「性同一性障害の性別の取扱いの特例に関する法律」が施行されて以降、性同一性障害（Gender Identity Disorder：以下GIDとする）を取り巻く環境は急速に変化し、性の多様性を容認した社会の実現が求められるようになってきた。

研究者は、GID者の会に助産師として参加する過程で、GID者の母親は、GID者と同じように悩みを抱えていることを知った。助産師は、性と生殖の専門職者として、GID者が自己の性を見つけ、自分らしく生きていけるように、母親の支援を充実することが重要であると考えた。

### 【研究目的】

本研究は、わが子に性別違和感をもつ母親に対する支援課題を明らかにし、今後の支援のあり方を検討することを目的とし、3つの調査研究から構成した。

**第1研究**；5歳から15歳の子どもをもつ母親の中で、子どもの性別違和感が気になる母親の割合とその母親の違和感について調査する。さらに、周囲の母親のGIDについての理解について明らかにする。

**第2研究**；GIDの子どもからカミングアウトを受けた母親の思いの経過や受けた支援、望む支援を調査分析し、性別違和感のある子どもをもつ母親にどのような支援が必要かを明らかにする。

**第3研究**；現在ピアサポートの会に参加している母親にとってのピアサポートの会の有用性を検討する。

### 【研究方法】

3つの調査研究は次のとおりである。

**第1研究**；量的記述的研究 無記名による自記式質問紙を配布し留置き調査を実施した。

**第2研究**；質的記述的研究 半構造化面接によるインタビューを実施した。

**第3研究**；質的記述的研究 半構造化面接によるインタビューを実施した。

## 【倫理的配慮】

本学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 15035・20041）。

## 【結果・考察】

**第1研究**；5歳から15歳の子どもをもつ母親1,758名に対し調査を行い、有効回答の466名（26.5%）を分析した。母親466名のうち、わが子に性別違和感があると気になる母親は、男児の母親2名、女児の母親5名の計7名（1.5%）であった。わが子の違和感をもち始めた時の子どもの年齢は2-5歳、9-10歳であり、それぞれの時期でわが子の気になる言動は違っていた。周囲の母親のGIDに対する認識は、言葉を知っている者は99.8%であったが、情報が入りにくい地域に住んでいるとする者が78.8%、GID者に関わったことのある者が29.7%であり、わが子に性別違和感をもつ母親が、「ママ友」に相談相手を求めても、対応できる状況ではなかったため、母親に対する正しい知識や情報を提供する必要がある。

**第2研究**；カミングアウトを受けた母親4名（50-60歳代）に面接を実施した。母親たちは、カミングアウト前では、子どもが不登校や自殺関連事象を起すほど性別違和感を悩んでいたことを気づいていなかった。カミングアウトに衝撃や戸惑いがあったが、気づいてあげられなかった後悔や罪悪感を抱いた。母親は家族や学校、子どもの友達などからの支援を受けた。望む支援としては、「母親同士の横のつながりがほしい」としていた。子どもからのカミングアウトによって、悩みを抱える母親が個別相談できる場や、母親の会などの組織づくりが支援課題である。

**第3研究**；ピアサポートの会に参加している母親4名（40-50歳代）に対し、電話にて面接を実施した（COVID-19対策のため、対面面接はできなかった）。母親にとってピアサポートの会は、GIDの知識や情報を得られるだけでなく、同じ経験者と出会い孤立感が和らぎ、心の安らぎを得られる場であった。さらに、参加者の体験談を聞き、わが子と歩み寄ることができた。子どもに明るい将来を伝えたいと、仲間存在から社会的活動の動機を得ていた。助産師として、ピアサポートの会に参加する母親たちへの精神面でのサポートや、より良い会になるような支援が必要である。

## 【結論】

1. わが子の性別違和感について気になる母親は、1.5%（466名中7名）いることが明らかになった。
2. 母親が、わが子に性別違和感をもち始めた時の子どもの年齢は、2-5歳と9-10歳であり、それぞれの時期でわが子の気になる言動が違っていた。
3. 母親がわが子の性別違和感に対処するため、相談相手を求めても、「ママ友」も学校教員も対応できる知識や取り組みに対する関心が弱い状況であった
4. GIDの子どもを持つ母親は、カミングアウトまで、子どもが不登校や自殺関連事象を起すほど性別違和感を悩んでいたことを気づいていなかった。
5. GIDの子どもを持つ母親が受けた支援は、家族、学校、子どもの友達やGIDの関連団体からの支援であり、望む支援として、「母親への支援希望」「社会に対するGID者支援への希望」「学校や教員に対する希望」「法制度に対する希望」であった。
6. 母親はピアサポートの会に参加し、同じ体験者と出会い、知識や情報の入手と共に、心の安定感を得

ていた。さらに仲間の存在から社会的活動の動機を得て、子どもが生きやすい社会をつくるために行動を始めていた。

以上より、わが子に性別違和感をもつ母親に対する助産師による支援課題は以下のとおりであり、これらの課題を実施することが助産師の支援のあり方として求められていた。

- 1) 知識の普及、情報の提供
- 2) 助産所の機能を活かした個別相談や個別支援
- 3) 助産師と学校の教員や養護教諭との連携
- 4) ピアサポートの会の支援
- 5) 偏見や疎外がない多様な性を認める社会の構築に向けた、母親活動の支援。

### 論文審査の結果の要旨

本研究は、性の多様性を容認した社会の実現が求められている中で、GIDの問題はGID者だけでなく家族を巻き込む問題であることを研究者は長年にわたるGIDの支援活動に助産師として参加する過程で認識し、GID者の母親もGID者と同じように悩みを抱えていることから母親の支援のあり方を探求したことは意義がある。

本研究は、3つの調査研究から構成されている。当初の研究計画書に基づいて第1研究と第2研究を実施し、第3研究は研究計画書を修正して倫理委員会の承認を得て実施して論文を完成させた努力を評価する。

第1研究で、子どもの性別違和感が気になる母親の割合と違和感と周囲の理解を明らかにし、第2研究で、GID者である子どもからカミングアウトを受けた母親の思いや経過を明らかにし、第3研究でGID者の母親がピアサポートの会でどんな支援を受け、さらにどんな支援を受けたいのかを明らかにしている。GID者の母親の支援のあり方について、子どもの性別違和感が気になる段階からカミングアウトの段階と母親がピアサポートの会に希望をもって参加している段階を総合的に総括として考察して支援課題を明らかにして支援のあり方を論じていることはオリジナリティーがある。

分析方法を洗練して既存データの分析を再度行ない、本論文を完成させた努力を評価する。

以上の結果から、本論文が著者に博士（看護学）の学位を授与するに十分な価値があるものと認められた。